

## 6班：「分析結果を活かせる組織」

○山本鉦（九州工業大学）、持田夏海（福島大学）、土田拓（信州大学）、井上雄介（琉球大学）、押海圭一（総合地球環境学研究所）、大島昭子（宇宙科学研究所）

### 1. 議論結果の概要

〈個別課題：要約〉

- 総合地球環境学研究所：評価に必要なデータを円滑に収集すること。  
文系の研究あるいは文理融合研究を適切に評価すること。
- 宇宙航空研究開発機構：他機関の一研究所、一部門の論文データだけを取り出して、そこと宇宙科学研究所を比較する事が大変難しい。
- 福島大学：研究IRのレポートを行う場や対象者を明確にすること。  
事務職員ばかりのIR推進室では研究について議論が及ばないこと。
- 信州大学：学術文献DBに収録されていない論文を分析に活用すること。  
学内に点在する研究業績データを一元管理すること。
- 琉球大学：理系と文系で客観性のある統一した基準を基に分析すること。  
分析結果を執行部を含めた教職員と共有すること。
- 九州工業大学：執行部が必要とするデータを予測し、事前に収集すること。  
学内データを一元管理すること。

〈作成プロセス〉

#### ① IRに対して各機関が抱える問題点や課題の報告

各機関2~3分程度で、それぞれの所属機関における実務上の問題点や課題を報告した。

#### ② 共通する問題点の洗い出し

報告された問題点に対する意見交換を行い、そこから以下の共通した問題点を抽出した。

- 分析の目的や、分析対象データが分からない場合がある。
- 分析担当者の地位が確立されておらず、教員・事務職員・執行部のいずれに対しても影響力が小さい。

#### ③ 問題の本質を把握

上述の問題は、「各所属機関において、分析結果を活かす体制がとれていないために生じている」という結論に達した。これは、教員・事務職員・執行部でIRに対する温度差があること、あるいは問題意識の程度に差があることに起因すると考えられる。

#### ④ 改善策の検討

「分析結果を活かすことができる組織にする上では、何が必要になるか」ということを中心に意見交換を行い、そこで得られた意見をポスターにまとめた。

〈ポスターの説明〉

事務職員や教員だけでなく執行部においても、問題意識や、自機関のデータ分析に対する目的

意識が不足している場合がある。これではデータを分析しても意思決定や改善に繋がる可能性は低い。そこで、分析結果を活かすことができる体制を構築することが必要であると考えた。

そのためには、「事務職員や教員、執行部といった関係者が自ら意見を出し合うことができる場を設けることが重要である」との結論に達した。議論する上で必要なデータは IR 担当者が提供する必要がある、そのためには、以下に注意すべきと考えた。

- 情報は適切なタイミングで提供する。
- 分析担当者の問題意識を伝えるのではなく、関係者が自発的に問題意識を持てるよう、大学の現状を的確に伝える資料を作成し、提供する。
- 必要に応じて、他機関だけでなく過去の自機関との時系列比較も行う。

その上で特定の実施事項について、関係者間における意識の統一を目的に、意見を出し合う場を設け (P)、実施事項に対する議論を行い (D)、意識が統一されたか否か確認する (C)。意識が統一できない場合は、その要因を分析し、議論する上で必要なデータを変更するといった、意識の統一に向けた対策を講じる (A)。例えば、研究 IR においては「研究分野の違いに応じた客観的な評価指標の構築」について、教学 IR では「博士課程の入学率充足率の管理方法」について議論することが考えられる。これにより、目的意識や問題意識が共有されると、組織が自律的に運営されていく可能性がある。また、自律的な運営が行われるようになると、文部科学省が定めた制度に沿うことが難しくなる場合も想定される。複数の大学で自律的な運営が可能になれば、同じ問題点を有する大学間で連携し、文部科学省の制度改正に向けた交渉が可能となるかもしれない。

## 2. グループ討論を通して感じた評価や IR を改善に活かすためのコツ、感想等

### <まとめ>

IR 担当者が問題に感じたことについて、分析を踏まえた資料を作成し、関係者へ報告することが多い。これにより問題を知ってもらうことはできても、切実な問題として扱われ、改善に向けた取り組みがなされるとは限らない。そこで、問題点を自発的に認識できるような資料を作成し、関係者へ提供することも、有効な手段となり得ることが分かった。また、その問題を、関係者が集まる場を設け、共に考えて貰うことで、問題点や課題の共有が図られ、解決に向けた取り組みにも協力が得られやすくなると考える。

このように、分析担当者が問題点の提供から、場の設定まで幅広く携わっていくためには、分析だけではなく、資料作りに対するスキルの向上や、事務職員や教員とのネットワークも築いていく必要がある。なお、これが実現すると、所属機関内における分析者の存在が高まると考えている。

### <感想>

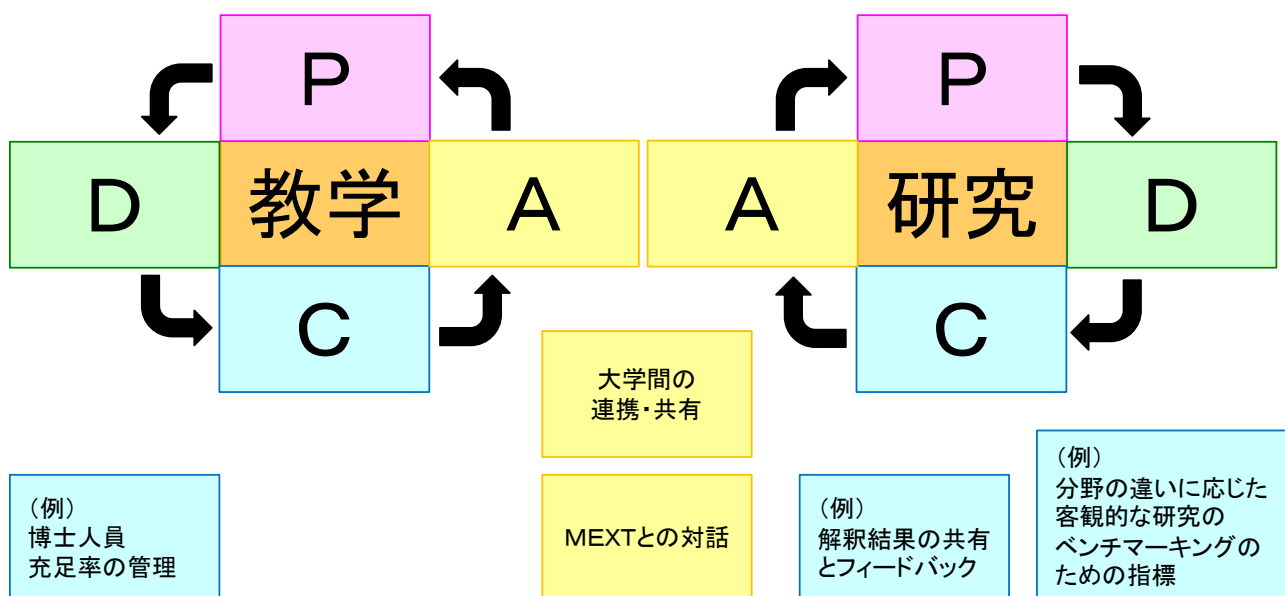
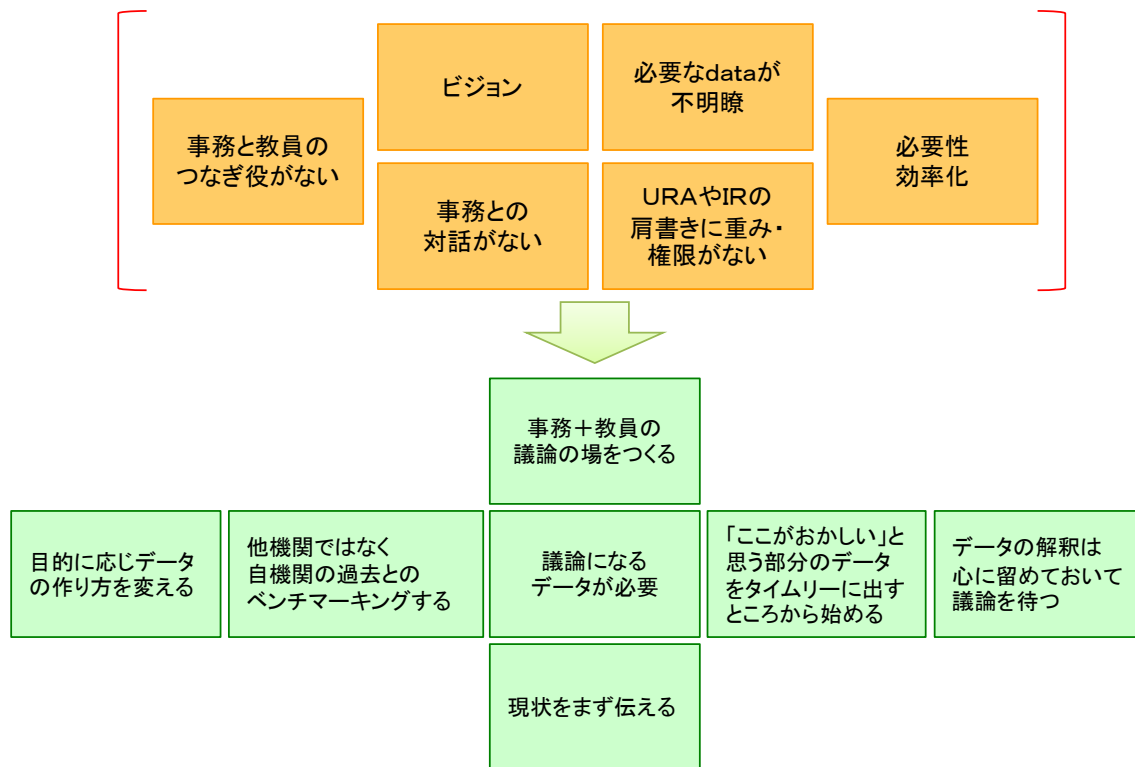
様々な機関が抱える問題や、IR の実施内容を共有することができ、大変有益であった。

共通問題点に対する解決策を議論した後、各機関の個別課題を解決する上でどのように役立つかを議論する必要があったものの、時間の都合上実施できなかった。グループワークをより有効に活かすために、ファシリテーターとしてここでの反省を次に活かしていく必要がある。

# 6班

## 分析結果を活かせる組織

目的意識の欠如 ↔ 問題意識の欠如



★ 自律的な組織運営の実現